

尾道商業会議所記念館〈第12回企画展示解説〉

(2009年10月30日～2010年3月3日)

テーマ 尾道あ・ら・かると
～北前船と商人の町～

【自治都市 尾道】

江戸時代（1603年～1867年）に入ると西廻航路が開発され、尾道は中・四国の玄関港のみならず、北前船によって北日本の物産がもたらされ、再び活気づく。尾道からは特産の塩・錨・酢・綿などを積んで出航した。この北前船の寄港によって、尾道はまさしく「芸州藩（広島藩）の台所は尾道」となったのである。町の治安は当初、5人の町年寄と12組60人の月番制行司による自治行政が行われ、堺・京都・博多などと同様な商人による自治都市的な組織が形成されていった。1715（正徳5）年、町奉行所が置かれ年寄－組頭－月行司が公的性格をもつようになり、公的権力を利用し、1740（元文5）年に「問屋掟」を発表して、町年寄職を独占する商人もあらわれてきた。「掟」は、問屋相互間の取引を円満にし、その紛争防止が目的で町奉行の命令を基にしたものを問屋頭人の名で発表したものである。これは当時の尾道奉行平山角左衛門が、以前からの商人の慣行を定文化したのもであった。

1715（正徳5）年、問屋は55軒であったが、1740（元文5）年には、66軒となった。1764（明和元）年、藩札の価値が暴落し、尾道で商業活動ができなくなり、浜商人は結束して問屋座会所をつくり、商業活動の建て直しをはかる。問屋仲間の利益代表機関として、同業者が共同自治制を行った。これにより尾道浜商人の信用も回復し、再び活況を呈するようになる。1766（明和3）年に「株仲間」が創設され、「いろは四十八」にちなみ、その数を48軒に限定し、1780（安永9）年には問屋座の定法を定めている。

【慈観寺（写真提供：NPO法人尾道文化財研究所）】

天保の飢饉の時、時の豪商灰屋吉兵衛が個人で住民救済事業（いわゆる失業対策事業）として本堂を再建した寺院。



【江戸時代の尾道町割図（尾道市教育委員会所蔵）】

江戸時代の1821（文政4）年の尾道町の古図。奥行きが深い商家の中に戦国時代から江戸時代にかけて尾道の3大豪商の笠岡屋（小川家）、灰屋（橋本家）、泉屋（葛西家）などの名前が見える。



【古地図に描かれている現在の尾道】

1821（文政4）年の古地図の現在の姿。南北に長い町屋の面影を残している。



ろてきあん
【豪商が寄進した浄土寺露滴庵】

(写真提供：NPO法人尾道文化財研究所)

豪商天満屋（富島家）が寄進した茶室。もと京都の伏見城内にあった茶室で、その後京都本願寺に移築されていたものを16世紀後半～17世紀前半に広島藩の浅野公が拝領し、その後1814（文化11）年、天満屋が譲り受け、天満屋により尾道の対岸の向島の海物園（天満屋の庭園）に京都より移築。その後浄土寺に寄進された。桃山時代に創建された建物。国の重要文化財。



【戦国時代～江戸時代の豪商】

戦国時代の末期に山名氏の恩恵を受けた商人に代わり、毛利氏に従った商人が尾道に入る。その代表が大西屋（渋谷家）、笠岡屋（小川家）、泉屋（葛西家）で、笠岡屋と泉屋は1595（文禄4）年に尾道代官に任命され、尾道を支配した。一方、大西屋は沼隈郡（現福山市）五カ村463名を与えられ、関船役儀用として7反帆船を仰せ付けられていた。

江戸時代になると、豪商たちが藩（のち奉行所）のお触れや指令の伝達、町内の収税、町名主の監督などを行う町年寄に任命され、実質上尾道の町を運営することとなった。

「尾道町年寄」の変遷

久保町		
泉屋左右衛門(葛西家)	1658～1660	(万治元年～万治3年)
今倉屋	1661～1672	(寛文元年～寛文12年)
金屋	1661～1676	(寛文元年～延宝4年)
泉屋	1676～1715	(延宝4年～正徳5年)
灰屋勘七(本橋家)	1715～1725	(正徳5年～享保10年)
泉屋	1726～1740	(享保11年～元文5年)
泉屋	1736～1771	(元文元年～明和8年)
泉屋	1764～1780	(明和元年～安永9年)
住屋(島居家)	1780～	(安永9年～)
住屋	～1809	(～文化6年)
灰屋吉兵衛	1801～1843	(享和元年～天保14年)
灰屋虎蔵	1843～1854	(天保14年～嘉永7年)
金屋始太郎	1854～	(嘉永7年～)
十四日町		
笠岡屋(小川家)	1658～1660	(元治元年～万治3年)
栗原屋	1684～1687	(貞享元年～貞享4年)
鱒屋(勝島家)	1704～1761	(宝永元年～宝暦11年)
金屋	1761～1771	(宝暦11年～明和8年)
住屋	1781～1800	(天明元年～寛政12年)
油屋	1801～1829	(享和元年～文政12年)
富吉屋	1804～1817	(文化元年～文化14年)
灰屋吉兵衛	1854～	(嘉永7年～)
土堂町		
春屋	1658～1660	(万治元年～万治3年)
灰屋次郎衛門	1661～1672	(寛文元年～寛文12年)
大紺屋(島居家)	1688～1817	(元禄元年～文化14年)
鱒屋	1688～1817	(元禄元年～文化14年)
栗原屋	1716～1763	(享保元年～宝暦13年)
笠岡屋	1751～1843	(宝暦元年～天保14年)
天満屋芳右衛門(富島家)	1760～1765	(宝暦10年～明和2年)
金屋	1772～1853	(安永元年～嘉永6年)
富吉屋	1840	(天保11年)
三木屋	1844～1847	(天保15年～弘化4年)
高橋七郎衛門	1844～1854	(弘化元年～嘉永7年)
亀山元助	1854～1860	(嘉永7年～安政7年)
亀山佐太郎	1860	(安政7年)

【豪商天満屋の瓦（尾道市所蔵）】

塩田を経営していた豪商天満屋（富島家）が、尾道市向島町の島崎（あたり）一円を庭園とし、山麓に別荘を建て、海物園と名付ける。海物園の母屋の棟瓦。

